

心理系大学院 入試対策ガイド

- 心理系の大学院入試は、しっかり準備すれば、(たぶん)誰でも合格出来ます。
 ただ、その準備の仕方がわからないという人が多いのではないのでしょうか。
- では、大学院受験とはどのようなものなのか、何を準備すればよいのか、どこから手を付けたらよいのか…。そして、そもそも、「臨床心理士」や「公認心理師」とは何なのか。
- 皆さまのそのような疑問について、様々な角度からお話いたします。

1. 臨床心理士とは？

I 臨床心理士という資格

○資格としての「臨床心理士」

- ・臨床心理士は文科省管轄の任意団体である“臨床心理士資格認定協会”が発行する民間資格である。
- ・国家資格ではないので、仕事の保証はない。また、国家資格のように“業務独占”や“名称独占”の拘束力がないので、資格がなくてもカウンセラーとして仕事をすることはできる。
- ・ただ、心理的援助の現場では“臨床心理士”が最も信頼されてきた資格なので、心理的問題に対する援助の仕事をしたければ、臨床心理士資格を得ることがほぼ必須である。

○臨床心理士の仕事は面白い！

- ・ハッキリ言って、臨床心理士は儲からない。中にはそれなりの高給取りもいるが、それはほんの一部の商才のある人が、よほどうまくやった場合に限られる。
- ・だが、ちゃんと仕事すれば、生活に困窮しない程度の収入は得られる。都内のタワーマンションの購入は無理だが、郊外のマンションなら買える。ベンツ・BMWを新車で買うのは無理だが、国産車ミニバンなら買える。つまり、ちゃんと仕事すれば、一般的なサラリーマン程度の給料はもらえる。
- ・そして、仕事は面白い。苦しんでいる人々が成長し、自立し、社会復帰を果たしていくのを手伝う仕事である。面白くないわけがない。というか、それを面白いと思えない人に、臨床心理士は向かない。
- ・家族や学校の先生がどんなに働きかけても家から出られなかった不登校児童が、相談を繰り返すことで学校復帰を果たす。依存症で周囲の人々から見捨てられていたような人が、カウンセリングで立ち直る。生きる意味を見いだせずにいた学生が、支援活動に参加することで自分の価値を見つけ出す。そんな経験は、他の仕事ではなかなかできないだろう。
- ・多くの臨床心理士が仕事のやりがいとして口を揃えるのは、「人との出会い」である。自分の日常生活では接点のなかったような人々が、クライアントとしてやってきて、自分の知らない人生を垣間見ることができるのである。信じられないような過酷な人生を歩んできた人がいるかと思えば、エリート街道まっしぐらだったのに転落してしまった人もいる。生活保護で明日の食費も出せないような人もいれば、億単位の資産を持っている人もいる。男もいれば、女もいるし、男でも女でもない人もいる。そういう人々の人生を少しだけ一緒に歩み、誰もが自分とは違う生活を送っていることに思いを馳せるとき、生きることの難しさ、そして尊さに気づくことができたりする。
- ・もちろん、キレイ事ばかりではない。クライアントに自殺をほのめかされてうろたえることや、強烈な罵声を浴びせられて凹むことも、日常茶飯事。だが、そんなときこそ、臨床心理士の腕の見せ所である。その局面を乗り越えることで、クライアントがまた一歩、社会復帰に近づいたりする。
- ・更に言えば、仕事を通じて知り合う異業種の人々との交流は、自分の人生の財産となりうる。就職先の病院で世話をしてくれた精神科医が超有名な人だったり、一緒に仕事をした臨床心理士が数百人規模のNPOを主催していたり、研究会で仲良くなったオジサンがその道で知らない人はいない社会活動家だったり…というようなこともしばしば。そういう人々との関わりが、自分の活動の幅を広げ、自分の成長にも繋がる。

○ただ、“イメージ”と“現実”は違う！

- ・「臨床心理士」と言うと、病院の診察室のような部屋で、うつ病などの患者さんのカウンセリングをして、夢分析などしながらその人の病気を治して・・・というイメージを持っているような人もいるだろう。ところが。。。そんな仕事をしている臨床心理士など、むしろ少数である。
- ・そもそも、臨床心理士の仕事は、カウンセリングだけではない。心理療法や心理テストばかりやっているわけではない。まして、テレビ番組でやっているような、ニュースに登場する犯罪者の心理を分析して見せたり、芸能人同士の会話を聞いてその人の性格を探ったり・・・みたいな仕事など、臨床心理学とは全く関係ない。
- ・臨床心理士は、精神科医ではない。ただの相談屋さんでもない。心理学に関する深い専門知識を持ち、その知識を生かして他者の生活を立て直す高度な技術を持ち、その知識や技術を常に保ち続けるための努力を惜しまない、「臨床心理学の高度専門職」が臨床心理士である。
- ・そして、実際の仕事は、社会の中で苦しんでいる人々の生活に寄り添うような仕事、全般である。
- ・苦しんでいる人は、精神障害者ばかりではない。発達障害・パーソナリティ障害・身体障害などを持つ人々、失業や借金で生活苦に陥っている人々、アルコールやギャンブル依存で生活が破たんしている人々、いじめ・犯罪・ハラスメント・DVなどの被害者・加害者の人々、セクシャルマイノリティの差別に苦しんでいる人々・・・などなど、現代社会の“底辺”と呼ばれるような環境で、必死に生きている人々である。
- ・臨床心理士は、とても華やかでスタイリッシュな仕事に見えるかもしれない。都会的な洗練された職場で小綺麗なカウンセリングルームが用意されている様子を想像しているかもしれない。しかし実際には、人間のドロドロした汚い部分に目を向け、差別や偏見の現場に足を向け、日本社会の負の側面に自ら首を突っ込むような、泥臭い仕事だと思った方がよい。

II 臨床心理士の行うべき専門業務

○臨床心理士の行うべき業務とは？

- ・臨床心理士資格認定協会が規定している“臨床心理士が行うべき専門業務”が4種類ある。
 - ①臨床心理査定：心理的支援の前提となる、クライアント理解のための情報収集や検査など
 - ②臨床心理面接：いわゆるカウンセリング・心理療法など
 - ③臨床心理学的地域援助：心理社会的な不適応の予防を中心とするコミュニティ心理学的活動
 - ④上記①～③の発展に関わる研究
- ・これらの仕事を「専門家として」「高いレベルで」行いうる人材が臨床心理士、という位置づけになるので、大学院では、これらについての教育や訓練をうけることになる。
- ・ただ、これはあくまでも“資格”としての要件。実際の仕事においては、上記4つ以外の能力や技術も求められる。そして、求められる能力・技術は、職場・職域次第。大学院で習得した技能だけで全うできる仕事などほとんどなく、実際には、仕事をしながら、新たなことを貪欲に学んでいかないと、仕事はできない。臨床心理士は専門職なので、一生勉強である。

2. 公認心理師とは？

I 公認心理師という資格

○ご存知の通り、平成29年度に「公認心理師」という国家資格が創設され、平成30年度には初の資格試験が行われた。

- ・公認心理師は心理職従業者に“国によるお墨付き”を与えるために企画された資格である。
- ・名称独占資格であり、今後、新たに紛らわしい名称の資格を民間事業者が立ち上げることなどはできなくなる。（現行の臨床心理士資格は存続することになっている。）
- ・ただし業務独占資格ではないので、公認心理師資格を持たなくても、心理臨床に携わることができる。（当然、臨床心理士は従来通り、仕事することができる。）

○臨床心理士と違い、公認心理師資格は、大学で心理学の単位を修得していることが条件とされる。

- ・そのため、心理学以外の学科に在籍もしくは卒業した人で、受験要件とされる心理系の単位を修得できていない人は、公認心理師の資格試験を受けられない。
- ・一方、心理系の大学で必要な単位を修得し、卒業後に心理臨床の業務を一定年数経験すれば、大学院を修了しなくても、公認心理師の受験資格を得ることは可能。つまり、公認心理師は、大学卒でも取得可能な資格である。
- ・ただし、これは大学卒業後に心理職公務員としてキャリアを積んだ人などを想定しており、ハードルはかなり高いので、誰でも“大学卒業だけで公認心理師を受験できる”というわけではない。基本的には、公認心理師を目指す場合も、大学院に行くことになる。

II 臨床心理士との住み分けについて

○公認心理師の専門業務として想定されているものは、現行の臨床心理士の専門性とほぼ重複する。

- ・そのため、現在の臨床心理士有資格者は、殆どの人が公認心理師資格も取得すると思われる。
- ・ただ、公認心理師資格は明らかに医療分野における「医者の補助業務」を想定して制度設計がなされており、従来「社会福祉士」や「精神保健福祉士」などが担っていた業務を心理職にやらせようとしているので、主に期待される業務は、心理療法などではなく、おそらくソーシャルワークである。
- ・一方、臨床心理士はこれまで文科省が面倒を見てきた資格であり、教育行政において重宝されてきた資格である。そのため、教育関連は臨床心理士資格を求められる場面が多くなるかもしれない。
- ・とはいえ、当面は、ほとんどの心理職従事者が臨床心理士と公認心理師のダブルライセンスになるので、職域の違いなどが明確になることはない。数年後には「臨床心理士のみ」「公認心理師のみ」といった有職者が増えてくるので、何らかの住み分けが生じる可能性はある。
- ・具体的には、医療分野（特に病院）は公認心理師が優遇される可能性あり。逆に、SCは臨床心理士が優遇される可能性あり。それ以外の領域については、資格による住み分けはあまり発生しないと思われる。

○公認心理師資格の運用が始まって間もないため、実際のところは、蓋を開けてみないと分からない。

- ・臨床心理士資格は存続するし、今後もしばらくは臨床心理士さえ持っていれば仕事を得ることは可能。
- ・そのため、心理学科卒業であっても、そうでなくても、心理臨床の仕事をしたければ、当面は、臨床心理士になることを目指すのが現実的。
- ・一方で、病院勤務をメインで考える場合、公認心理師の資格を取らないと仕事ができなくなる時代が来る…という可能性も考慮しておきたい。
- ・また、産業領域において、ストレスチェックの実施者として公認心理師が認められたので、今後は産業カウンセラーも、公認心理師有資格者が優遇される可能性がある。
- ・心理系の学部^{に在籍・卒業していない人で}、臨床心理士資格だけでなく、公認心理師資格をどうしても取っておきたいと考えるならば、大学への再入学、あるいは3年次編入、場合によっては学内における転部などによって、心理学科に入る必要がある。（ただし、公認心理師カリキュラムに対応する心理学科を有する大学に限る。）

3. 「臨床心理士・公認心理師」の職域

I 臨床心理士・公認心理師の職域

○従来の臨床心理士の職域（つまり就職先）としてメジャーなのは「医療」と「教育」の2領域である。

- ・医療現場（主に精神科・心療内科）では、医師の指示に従い、心理面接や心理検査、知能検査を実施。
- ・治療行為の主体は医師だが、医師の監督の下、いわゆる「カウンセリング」も行う。
- ・ただし、臨床心理士は医師や看護師と異なり、医療現場での職務に法的根拠はないので、臨床心理士の行う行為に保険は適用されない。心理学的な治療法である認知行動療法も、医師が行う場合は保険が適用されるが、臨床心理士が行う場合は適用外。よって、カウンセリングなどは患者の全額自己負担になるか、あるいは病院のサービスとして行われる。
- ・今後は、国家資格である公認心理師が保険適用の上、その役を担う可能性がある。その場合、臨床心理士のみ資格保有者は、病院などで採用してもらいにくくなる…かもしれない。
- ・教育現場としては、学校に配置される「スクールカウンセラー（SC）」がメジャー。
- ・現行のスクールカウンセラー制度は文科省の事業であり、全校配置を目指して、教育委員会に補助金が支給された。また、補助金が適用される条件として、SCは臨床心理士、精神科医、もしくはそれに準ずるもの…とされた。ただし、実際には各自治体の独自採算事業としての募集・採用も多く、その場合、臨床心理士の資格がなくてもSCになれることが多い。
- ・SCの業務は徹頭徹尾、コミュニティ・アプローチである。個人心理療法を行うことはほとんどなく、教員・保護者・その他職種の人々との連携によって、学校で生じる様々な心理学的問題に対処する。
- ・SC以外でも、各自治体が独自に採用する教育相談機関での心理相談員なども、教育系の職場である。

○もう一つ、臨床心理士の就業者が比較的多い領域が、「福祉・保健」分野である。

- ・児童相談所の心理職や保険所・保健センターの発達相談員、市役所の相談窓口の心理相談員など。職務内容は職場次第だが、相談員というよりも、ソーシャルワーカー的な仕事であることが多い。
- ・つまり、その業務の中心はカウンセリングではなく、それぞれの相談者の生活改善を目指し、他の行政機関への橋渡しを行ったり、家庭訪問をして様々な相談に応じたり…といった仕事を中心。
- ・これまた、カウンセリングルームに座ってクライアントの話を1時間聞いて…というような仕事はほとんどなく、SCと同じく、コミュニティ・アプローチがメインとなる。

II 採用・勤務形態について

○いずれの職域・現場も“非常勤”としての採用が多く、常勤での安定的な仕事は少ない。

- ・常勤の臨床心理士を雇う病院はわずかしかなく、週2～4日程度の非常勤雇用が中心。
- ・スクールカウンセラーは都道府県教育委員会が採用する場合、週1が基本だし、多くても週2。
- ・福祉・保健分野の仕事も週3～4日勤務の単年度雇用で延長は2回まで、つまり最長3年間の契約となることが多い。
- ・週5日勤務の終身雇用…という理想的な雇用はとて少ないため、募集があればそこに多くの心理士が殺到し、倍率数十倍という狭き門となる。
- ・念のために述べると、心理カウンセラーやセラピストとしての個人開業は、他の収入源がない限り、ほぼ不可能である。日本では心理的な問題をカウンセラーに相談する習慣がないので、開業しても、十分な収入が得られるほど、お客さん（クライアント）はやってこない。（例えば、結婚相手が高収入なので自分の収入は少なくとも大丈夫、などという場合は個人開業も可能だろう。）

○心理系の仕事で、最も安定しており、収入も良いのは、通常採用の心理職公務員である。

- ・都道府県単位で、通常の公務員試験と同時に、心理職公務員の採用試験が行われる場合がある。
- ・心理職公務員の職場は自治体ごとにまちまちだが、主にカウンセリングや査定業務を任される。
- ・家庭裁判所調査官、法務技官など、司法・矯正にかかわる心理職公務員も多数。・国家公務員（総合職・従来のI種公務員）の心理職もあるが、こちらはカウンセラーではなく、研究職がメイン。
- ・いずれの場合も、臨床心理士・公認心理師の資格は必要ないので、大学院に進学する必要はない。

○現行の臨床心理士は、その資格の性質上、“二足の草鞋”を認めない雰囲気強い。

- ・臨床心理士は“専門職”としての資格であり、心理臨床に本気で従事する人を養成することをイメージして立ち上げられた資格である。
 - ・ゆえに、“ほかの仕事をしなから”とか“教養のため”といったモチベーションでの受験者を排除する雰囲気があり、大学院入試の面接でも、“ほかの仕事との両立”などを語ると、不合格となることが多い。
 - ・公認心理師の資格がどのように機能するのか不明確なところがあるため、はっきりしたことは言えないが、少なくとも大学院入試については“自分は心理臨床の世界に骨をうずめます”というスタンスを示すのが無難だろう。
 - ・特に、現在ほかの仕事をしている人は、受験の際にほぼ確実に聞かれるので、ちゃんと合格できる答えを用意しよう。（基本的には「現在の仕事はやめて、心理臨床家としての覚悟をもって人生歩みま
- す」的な回答が必要。）

4. 大学院入試に向けて：志望校の決定

○大前提として、何のために大学院に行くのか…という明確な目標が必要。

- ・ これは入試の面接でも確実に聞かれるのだが、「大学院修了後、どのような仕事に就きたいのか」という具体的な職業観が必要である。
- ・ 面接で「資格を取りたい」と答えるのは、最悪の回答である。そんなアタリマエのことは聞かれていない。「有資格者として、どのような職場で、どのような人々を対象とし、どのような方法で、対人援助をしたいのか」というヴィジョンが求められている。
- ・ 言い換えると、大学院には「資格を取る」ために行くのではなく、「臨床心理士・公認心理師という資格を得て特定の職業につく」ことを目的として行くのが、理想的な考え方である。
- ・ 例えば「家庭環境を背景とする不登校の中学生を援助するためにスクールカウンセラーになりたい」「中高年のうつ病の予防をするために産業カウンセラーになりたい」という職業観があり、その職業につくための方略として「資格をとることが必要」というのが模範解答である。
- ・ 「スクールカウンセラーとして不登校問題に取り組みたいから、不登校支援の実績がある〇〇教授のいる△△大学の大学院で学びたい」というように、将来につながる勉強・研究のできる大学院を探るのが、志望校の選択である。

○志望校を選ぶ上で最も重要な基準は“学力”ではなく、“その学校で何ができるか”である。

- ・ 大学院での教育は、ほとんどの場合、受身の講義形式ではなく、学生の発表が主体のゼミ形式。
 - ・ 当然、どのようなテーマについて研究発表やディスカッションを行ってゆくかは、教員次第。
 - ・ よって、自分が専門としたいことを重点的に研究している教員がいる大学院を選ぶことが重要。
 - ・ 修士論文作成においても、適切な指導が受けられるか否かは教員次第。
 - ・ 例えば「自分は不登校の小学生の援助をしたい！」と言っても、そのような発達・教育系の分野を専門とする教員がいなければ、修士論文の作成には大変苦労することになる。
- ⇒大学院修了後にどのような仕事を専門分野としたいか、どのような心理療法を習得したいか、あるいはどのような研究をして行きたいかによって、受験すべき大学が決まってくると考えたい。
- ・ ということで、学校を選ぶ前に「（臨床心理士としての）自分の進む道」を選ぶことが必要である。
（どのような人を対象とした臨床活動を行いたいのか、どのような心理療法・技法を習得したいのか、どのような職域で仕事をしたいのか、などといったことを考えるのである。）

○“学力・偏差値”は受験の主要な基準にはならない！

- ・ 必ずしも“有名大学だから難関”“有名大学のほうが良い教育が受けられる”というわけではない。
- ・ また、1種指定校の方が教育内容が良く、2種指定校は劣る…ということもない。
- ・ 一方、どこの大学に行っても履修すべき講座の名称は似たようなものばかりだが、その講座の内容は、学校ごとに異なる。
- ・ そのため、いくら有名大学の大学院でも、自分の将来につながるような勉強ができないのであれば、行く価値はない。逆に、有名ではない大学の大学院でも、自分が将来やりたい仕事を専門とする教授がいるような学校ならば、志望校として考慮の対象となるだろう。
- ・ そもそも、大学院入試は問題の出題内容や傾向が学校ごとに大きく違うため、偏差値による単純比較ができない。そのため、合格するか否かは偏差値によって決まるわけではなく、その学校の入試問題の傾向に見合った勉強をしたかどうかによって決まる。
- ・ 言い換えると、難関大学の大学院に合格できたからといって、他の大学にも合格できるとは限らない。

○あまりオススメしないが、どんな学校でもいいから「資格が欲しい」というのなら…

- ・ 入試の過去問題を閲覧し、勉強しやすいと思える分野からの出題が多い学校を選ぶと、比較的ラク。
- ・ もちろん、最終学歴のネームバリューやブランドにこだわりたいならば、それも一つの選択基準ではある。（現実的に考えると、あまり有名ではない大学に比べると、そこそこ有名な大学の大学院のほうが、就職などにおいて有利な場合もある。ただし、新卒サラリーマン採用のような学歴フィルターはない。）
- ・ 学力を基準に考えるなら、大学受験の偏差値が自分の出身校と同等、もしくはそれ以下の大学に設置されている大学院ならば、比較的合格しやすい。
 - 各大学院の受験者はその大学の在学生・卒業生が多いので、偏差値の高い大学の大学院は受験生の元々の学力・能力が高く、モチベーションも高い。その分、他の大学出身の学生からみると、合格のハードルは高い。
- ・ もちろん、大学よりもレベルの高い大学院を目指すこともできるが、その場合は、他の受験生以上の努力が必要になるであろうことを覚悟するべきだし、浪人の可能性も考慮すべきである。

○志望校は1校に絞らないほうが良い。

- ・ どうしても東大でなければ…というような強烈なこだわりがないならば、志望校は複数考えるべき。入試は、どんなに実力があっても、運の要素が必ず作用する。そのため、1校しか受験しないと、浪人になる可能性もあるし、プレッシャーも高くなってしまい、精神的に苦しくなってしまう。
- ・ 前述の通り、志望校選びは“教員選び”といっても過言ではない。しかし、あるテーマを専門としている研究者が首都圏に一人しかいない…などということはありません。ちゃんと調べれば、様々な学校に近い領域の研究者がいるはず。
- ・ その中で、学力や通学時間などの条件が良い学校を選べば良いだろう。
- ・ もちろん、自分ではどの学校がよいのか判断できないなら、KALSなどでの相談をお勧めする。現在、大学の心理学科に在学中ならば、学校の先生にも相談すると良いだろう。

○公認心理師資格が必要だが、心理学科卒業ではない人は…

- ・ 臨床心理系の大学院を修了し、臨床心理士資格を取得してから、時間があつたら学部にも通いなおして受験資格を得られれば…と考えている人がいるが、それは不可能。公認心理師受験資格取得のためには、学部卒→大学院修了という順番で学位を取得する必要がある。
- ・ そのため、現状で公認心理師資格がどうしても必要だ、という方は、まず大学入学を考えよう。
- ・ 一般の大学受験を経て1年生からやり直す必要はなく、大学2 or 3年次編入で必要単位を収められるカリキュラムを組んでいる大学も多い。
- ・ また、そのようなニーズが社会人によくみられるため、通信制、しかも3年次編入で必要単位を収められる大学もある（東京近辺では「聖徳大学」と「東京福祉大学」）。一定期間・回数のスクーリング（通学での受講・実習）などもあるので、ある程度仕事を休めることが前提とはなるが、大学に4年間通学するのと比較すれば、費用負担などもはるかに低いので、考慮に値する。

5. 大学院入試の一般的な形態について

○語学力試験

- ・心理学の主要論文は英語で書かれているため、大学院入試で求めるのは「英語で書かれた心理学的文章を理解する能力」である。
- ・そのため、基本的には心理学論文の読解、もしくは全訳が入試問題となる。
- ・大学入試のような文法問題などは基本的に入試には出されない。
- ・いわゆる「英語力」だけではダメ。心理学の知識がなければ、読めないし訳せないだろう。
- ・逆に、心理学の知識があれば、文中の専門用語を拾うだけで、何について語られた文章なのかパラグラフフリーディングが容易となる。
- ・「日本語訳」をしなければならぬので、日本語で書かれた心理学の専門書や論文を読み、心理学論文において独特の言い回しを知っておくほうが良いだろう。
- ・単語レベルでも、一般的な英語と異なる意味で使われる単語も多いので、心理学英語に慣れておく必要がある。
- ・心理学専門科目の試験よりも点数の差が付きやすいので、苦手な人は英語に足を引っ張られないようにしなければならないし、得意な人は英語で点数を稼いでおきたい。
- ・「英語が苦手」という自覚がある人は、その時点で大学院受験は確実に不利。まずは高校受験・大学受験レベルの“英語の勉強”からやり直そう。基本的な単語をおぼえ直し、イディオムをおぼえ直し、関係代名詞や完了形などの基本的な訳し方を見直し…、そういう勉強が必要である。
- ・「英語が得意」という自覚がある人は、それだけで大学院受験は有利。ただ、先に述べたように、特有の単語や特有の言い回しがあるので、それを覚えよう。

○心理学試験

- ・出題形式としては、100～200字程度の「用語説明問題」が5～10問、さらに長文の「論述問題」が2～3問、というのがオーソドックスなスタイル。
- ・穴埋めや記号選択のような、「用語」だけ覚えておけば解答できるような問題はほとんど出ないし、出されていても配点が低いので、「用語説明」「論述」に対応できなければ、合格はできない。
- ・出題内容は学校によって大幅に異なるため、一概には言えない。
- ・ただ、教科書的な知識だけ持っていれば答えられるような問題ばかりではなく、それらの知識を応用して考えさせるような問題も非常に多い。
- ・具体的には、特定の事例の心理査定方法やカウンセリングの進め方を考える問題、研究者間の考え方の違いを説明させる問題、特定の仮説を検証する実験計画を組み立てさせる問題、心理学に関わる時事的な事柄を心理学的に解説させる問題…などなど。
- ・研究者養成のカラーが強い大学院の受験では、相関係数や χ^2 乗値くらいの比較的計算しやすい統計量なら、示されたデータをもとに手計算をさせる問題が出ることもある。
- ・よって、志望校が決まったら、どんな分野・内容の問題がよく出されているのか調べるため、過去問題を絶対に閲覧すること。そして、その傾向に見合う勉強をすること。
- ・「どの大学院を受験しても合格できるよう、どんな問題が出ても対応できるように勉強する」という強迫的な態度は現実的ではないし、おそらく不可能。自分の志望校の出題傾向に特化し、受験準備はすすめるべきである。
- ・また、試験問題は論述・記述形式が中心なので、“知っている”だけでなく、“詳しく説明できる”というレベルの知識が必要。
- ・そのため、受験勉強も、本をひたすら読んで、用語を覚えて…というようなやり方は不毛。教科書や参考書に出てくる重要な用語について、何も見ないで書けるようになるまで、繰り返し、書く練習をするしかない！

○研究計画・卒論

- ・いずれも、出願時に提出を求める学校がほとんどであり、これも入学審査の対象になりうる。
- ・卒論は心理学の「論文」として一定レベルをクリアしていることが求められるし、研究計画では「研究者」としての方向性を具体的に示すことが求められる。
- ・そこで示す方向性は、その大学の教員が指導可能なものでなければならない。出願した学校の先生方の専門分野とかけ離れたことを書くと、それがネックとなって不合格となることもある。
- ・心理学科で卒業論文を書いた人の場合、その内容と研究計画書の内容は、関連のあるものにしておくほうが無難である。
- ・また、研究計画書は「私は〇〇に興味があるので、△△について研究したい」というような“志望理由書”とは全く別物。研究論文の一部というスタンスで書かれたものでなければならない。
- ・研究計画書は、言うならば“研究の設計図”であり、そこに書かれているとおりの手続きを実施すれば実際に研究が出来てしまうような、具体性の高いものでなければならない。
- ・また、研究計画書では過去の研究（先行研究）の紹介をしなければならないので、計画内容に沿った様々な論文を読まなければ書けない。
- ・そのため、研究計画書を書き上げるまでに、予想以上の時間と手間がかかる。最低でも出願の3か月前、出来れば半年くらい前には、準備を始めるほうが良いだろう。

○面接

- ・“やる気”では乗り越えられないのが面接である。
- ・受験生1名に対して教員複数名で行われる事が多く、学校によっては、全教員が面接官となる。
- ・尋ねられる内容はまちまちだが、志望動機や臨床心理士としての自分の将来のヴィジョンについて、かなり詳しく聞かれることがある。
- ・当然「臨床心理士になりたい」「カウンセラーになりたい」では話にならない。なぜ臨床心理士になりたいのか、どのような職場で働きたいのか、その職場の現実を知っているのか、なぜ他の大学ではなく、うち大学でなければならないのか…などの質問に、可能な限り具体的な回答を用意すべき。
- ・研究計画書や卒業論文についても尋ねられることがある。詳しい説明を求められたり、不備を指摘されたり、研究仮説を否定されたり…といったやりとりが想定される。さらに、その研究が自分の将来の仕事にどのように役立つのか、尋ねられることもしばしば。
- ・学校によっては圧迫面接を仕掛けてくることもある。気の弱い受験生が泣きながら面接室から出てくる…というような光景もしばしば見られるくらいなので、対策を考えておいたほうが良い。

6. 勉強方法について

I 心理学初学者は、まず心理学の概論・総論を押さえよう

○大学院入試を目指すに当たり、まずは基礎の充実が必要である。

- ・基本的なデッサンもできなければ芸術大学には入学できない。音符を読んだり楽器を演奏できたりしなければ音楽大学には入学できない。それと同じで、**基礎的な心理学の知識が無ければ、専門家の養成過程である臨床心理系大学院に入学することは無理。**
- ・大学院入試の問題は単純な穴埋めやマークシートではなく、論述などの応用的出題が中心。ということは、心理学っぽい本を読んで“わかった気になっているだけ”の化けの皮はすぐに剥がされる。基礎を理解している人の論述と、理解していない人の論述は、専門家が見れば雲泥の差である。
- ・よって、まず、心理学の基礎づくり。心理学の概論書を端から端まで読んで見よう。**読むべき本は、学習、知覚、認知、発達などがちゃんと書かれている本である。臨床心理学やカウンセリング理論ばかりの本はNG。**カウンセリングの本や大学院入試向けの用語集などをいくら読んでも、基礎学力は身につかない。

II 過去問題のチェック

○大学院入試の準備を始めたなら早い段階で行うべきことが、志望校の過去問題のチェック。

- ・基本的な用語問題ばかりではなく、特色のある入試問題を出す大学院が多数存在する。
- ・分野としても、精神力動系の問題ばかり出す学校、事例の検討に関する問題を必ず出す学校、統計的検定に関する問題を何問も出す学校、発達臨床系の問題が特に多い学校…などなど、学校ごとに特徴がある。
→ということは、例えば「精神力動系の問題ばかり出す学校」を受けるならば、認知行動療法などの勉強は不要だろう。あるいは統計に自信がないなら「統計的検定に関する問題を何問も出す学校」は受けない方が無難だろう。
- ・**志望校の入試問題の傾向がつかめれば、重点的に時間をかけるべき分野、勉強を省ける分野、苦手な分野を克服すべき分野、などが見えてくる。**つまり、効率のよい勉強の配分ができるのである。
- ・よく出される分野・領域の見分けが付かないなど、重量配分が全く見当付かないのであれば、現時点では基礎学力不足。まずは基礎を身に付ける所から始めよう。
- ・時々、受験直前まで過去問を見なかった…という人がいたりするが、それはかなり危険な行為である。受験という人生の岐路において、そんな無意味な危険を冒す必要はない。

○出題形式は基本的に論述問題なので、その対策を怠らないこと。

- ・ほとんどの学校は、用語説明5～10問程度、長文論述2～3問という問題構成である。
→そのため、“一応知っている”というだけでは得点につながらず、“何も見ないで詳しく説明できる”だけの实力が必要。
- ・記号選択や穴埋め問題も出されるが、これらの問題は配点が低いので、やはり論述力が必須である。

III とにかく「見ないで書く」

○大学院入試のための勉強としては、「書く」ことが最良の勉強法である。

- ・まずは、志望校の傾向にあわせて重要語句やキーワードをピックアップし、その用語を何も見ずに説明できるかどうかをチェックしてみよう。
- ・ピックアップすべき用語は、過去問でよく出題されている分野・領域の専門書からピックアップできる。3冊ほどの本を読み、どの本にも出てくる用語が、重要語句である。
- ・また、**それぞれの学校の教員が著者、もしくは共同執筆者となっている本からは確実に出題頻度が高い。**それらの本はくまなくチェックすべき。
- ・**説明できそうと思ったら、それを自分の言葉で、本を見ずに、200～500文字程度の文章にまとめてみよう。**実際に書いてみると、非常に難しいことに気付くことが多い。

- ・ 受験勉強の際には、必ず複数（3冊以上）の本を手元に置き、それらを見比べること。そして、どの本にも出ている内容を探ること。その部分こそが、心理学における基本であり、受験にとって最も重要な知識である。
- ・ そのような“重要な部分”を絞り込んだ上で、その部分をじっくりと読み込む。もちろん、1冊だけでなく、3冊以上読む。それによって“理解”を深めたら、それらの本を「見ないで書く」という作業をする。
- ・ 何も見ずにちゃんと書けたなら、理解は十分できているだろうが、書けないならば、理解が不十分なので、もう一度、読み込む。そして書く。
- ・ この作業を、自分なりに納得の行く文章を、何も見ずに書けるようになるまで、繰り返す。
- ・ そして、何日かたってから、また同じ用語にチャレンジする。
- ・ 出来なければもう一度、調べなおして書く練習をする。

○用語説明・論述の際に「誰にでも分かる文章を書く」必要はない！

- ・ 上記の練習においても言えることだが、大学院入試の記述・論述問題は「作文」を求められているわけではなく、“専門知識を有している”ということを示すための文章が求められている。
- ・ 小・中学校では「作文は誰にでもわかるように書きましょう」と習ってきただろうし、専門以外の小論文なども「誰にでもわかる文章」であることが求められるかもしれない。しかし、大学院入試の記述・論述問題への解答文を書く場合、その考えは放棄しなければならない。
- ・ 目指すのは、専門用語がふんだんに使われており、心理学を勉強していない人が読んだらチンプンカンプンになるような文章。つまり、徹底的に専門論文的な文章である。
- ・ 特別な指定がない限り、噛み砕いた説明、具体例をあげながらの説明など、素人向けの表現は一切排除。専門用語を専門用語のまま理解できるのが専門家なので、専門用語を使うべき部分は、ちゃんと専門用語を使う。言い換えると、どんなに分かりやすくても、誰でもわかるような文章になっていても、ちゃんと専門用語を使うことが出来ていない答案は、評価・点数が低い。
- ・ ということは…ひとつの用語を説明するために複数の専門用語を用いて文章を構成しなければならないわけであり、受験生が覚えるべき情報量は膨大なのである。

○上記の勉強手順は、確実に時間がかかる。しかし、確実に身につく。

- ・ 参考書やテキストは、ただ読んでいても、論述力は身につかない。
- ・ どのように表現すれば説明できるか、言葉を選びながら文章をつむぐ作業をすると、自分でもよく理解できていないものは表現しようがないので、自分なりの表現を見つけるために、何度も読んだり考えたりする。その繰り返し（心理学用語では“リハーサル”！）によって、記憶は定着する。
- ・ そのためにも、上記のような“文章を書く”勉強法を実施する際に、参考書に書いてある表現を丸写しするのはナンセンス。自分なりの言葉・表現を探さないと、勉強にならない。

IV 参考書の使い方

○勉強をする際、参考書は必ず複数のものを使用すべきである。

- ・ 心理学の参考書はその著者が大切だと思うことを書き、大切だと思わなかったことは書かないので、特定の1冊だけを頼りに勉強すると、知識に偏りが生じがちである。
- ・ 先述のような用語説明の練習をする場合、複数の本（最低3冊！）を開かなければダメ。
- ・ 複数の本の記述を見比べてゆくと、特定の用語に関して、どの本にも共通して記載してある事柄がある一方、どれか一冊の本にしか記載されていないような事柄もある。当然、その用語を説明する上で重要な、そして皆さんがちゃんと憶えるべき内容は、どの本にも共通して記載されている内容である。

- ・**最悪なのは、用語説明の勉強をしようとする際に、有斐閣などの「心理学辞典」を使うパターン。心理学辞典は便利だが、必ずしも良いまとめ方にはなっていない。**重要事項が抜けていたり、どうでもよい記述に多くの字数を割いていたりするので、これを元に自分の知識を作ろうとしても、無駄が多すぎる。安きに流れ、結局、時間と労力を無駄にするパターンである。
- ・また、インターネットを参照する人がいるが、ネット上の心理学用語などの情報は玉石混交。地雷を踏む可能性があるため、あまり信用しないほうがよい。

○受験勉強を進めるにあたり、参考書代は絶対にケチらないこと。

- ・**勉強をしていて、わからないことがあったときに、すぐに手元の本で調べられる状態にしておかないと、効率が悪すぎる。すぐに調べられず、後日調べよう…と思った内容は、結局調べないことが多いので、知識の穴になる。**
- ・大学院受験のための参考書として買った本は、大学院での勉学において必ず役に立つ。それどころか臨床心理士や研究者になった後まで、財産として残り続ける。さらに、臨床心理士の資格認定試験の勉強をするときに、またまたお世話になるのは間違いない。どうせその時には買うことになるのだから、先行投資として、今のうちに参考書をたっぷり買い集めた方がよい。
- ・金銭的なことに口出しするのは心苦しいが、参考書代は絶対にケチってはならない。最低でも心理学の概論書を3冊以上、臨床系なら臨床心理学の専門書を3冊以上、さらに志望校の出題傾向に合わせた本を3冊以上。できれば10～20冊くらいの本は集めると良い。多ければ多いほど良い。

○以下に、当面使える参考書を紹介する。ただし、これらは「基本」としての勉強に使えるだけであり、これらの本を勉強すれば、大学院入試のどのような問題にでも対応できるようになど、ならない。

- 無藤隆ら 編 「心理学」 有斐閣
- 下山晴彦 編 「心理学辞典 新版」 誠信書房
- 鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃 編 「心理学 第5版」 東京大学出版会
- 宮川純著 「臨床心理士・公認心理師大学院対策 鉄則10&キーワード100 心理学編」 講談社
- 坂井剛著 「臨床心理士・公認心理師大学院対策 鉄則10&過去問30 院試実践編」 講談社

V 英語は単語力、そして「正確に和訳」できるかどうか

○英語はもともとの得意・不得意が如実に点差として現れてしまうので、準備を怠りなく！

- ・社会人入試は英語免除…という学校もあるが、ほとんどの大学院では入試科目の一つとして英語が設定されている。
- ・どこの大学院の入試問題も、「英語」としてのレベルはさほど高くない。大学入試の時点でそれなりに英文和訳ができる程度の英語力があつたならば、「英語」としての能力はすぐに取り返せる。
- ・ただ、**大学受験当時の英語の偏差値が50台前半だった…**というような人は、**英語力を磨くことは急務。英語がネックで受験に失敗する可能性が高い。大学受験の時と同じように、あるいはその当時以上に、英語を本気で勉強するべきである。**
- ・**英語の能力がある程度備わっているならば、あとは「英単語」。**ただし、普通の英単語ではない。**心理学用語を「英単語」として覚えることである。**

→学校によるが、心理学の論文や著書の一部を全訳もしくは要約させる問題が中心なので、特殊な専門用語を英語として知っておかないと全く訳せない。専門用語をちゃんとした心理学用語として訳しているかどうか探点において大きなウェイトを占めるので、その点は絶対に怠りなく！

というわけで・・・

大学院受験の合格を目指すなら、その目的に応じた準備が必要。

準備には手間も時間もかかるが、適切な指導がなければ、ますます効率が悪い。

適切な指導を受けるなら、受験に関連する情報を大量に集めており、心理学・英語・研究
計画書すべてにおいて十分な指導が可能な、「河合塾KALS」へ！！